

ハウスミカンに発生する菌核病への対応					
[要約] <u>ハウスミカン</u> の開花期前後に <u>菌核病</u> による新梢枯死症状が発生して、問題になっている。本病に対する登録薬剤はないが、 <u>灰色かび病対策</u> が適切に実施されたハウスでの発生は少ない。					
上場営農センター・研究部 畜産・果樹研究担当				連絡先	0955-82-1930 uwabaeinousenta@pref.saga.lg.jp
部会名	上場営農	専 門	病虫害	対 象	ハウスミカン

[背景・ねらい]

早期加温型のハウスミカン園で花卉、幼果、葉身が白色の菌糸に覆われ、軟化腐敗し、枯死する症状が多発している。そこで、原因を究明するとともに、効果的な対策を見出す。

[成果の内容・特徴]

1. 花卉、幼果、葉身が白色の菌糸に覆われ、軟化腐敗し、枯死する症状が多発している(図 1-A, B, C)。
2. 登熟した夏枝や前年枝にも幼果等の発病部から腐敗が進行する。腐敗部の皮層にはしわが寄り、ヤニが形成され、腐敗部から先は枯死する(図 1-D)。
3. 症状部から分離されたカビはブドウ糖加用ジャガイモ煎汁培地上で白色の菌叢を呈し、黒色鼠糞状の菌核を形成し(図 2-A)、無傷接種で症状を再現する(図 2-B, C)。
4. 菌叢の特徴、生育温度範囲、および分子系統解析の結果から、本菌は菌核病菌(スクレロティニア スクレロティオラム)であると判断される。花卉、幼果等に対する発病適温は 20℃前後である(データ略)。
5. 灰色かび病に対する殺菌剤散布が実施されているハウスでは、菌核病の発生は少ない(表 1)。
6. ハウスミカンの開花期前後に灰色かび病対策として散布される殺菌剤に対する感受性が高い(表 2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 開花期～落弁期に発生が多いので、この時期には可能な限り換気を図り、発病を抑制する。
2. 発病部位には菌核が形成され、翌年の伝染源になるので、剪除してハウス外に持ち出し、適切に処分する。
3. 耕種的防除対策として高圧水による花卉除去で灰色かび対策を実施しているハウスでは本病発生のリスクが高い。

[具体的なデータ]

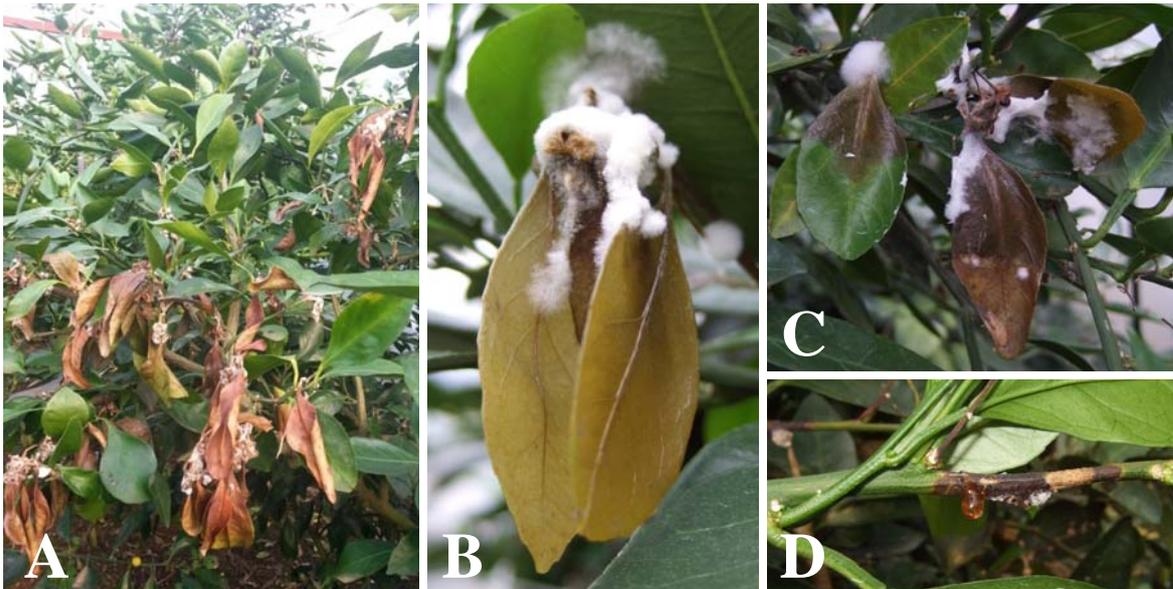


図1 菌核病による新梢、幼果の腐敗症状

A: 点々と発生している枝枯れ症状, B, C: 枯死部に形成された白色菌叢, D: 病斑部から噴き出しているヤニ



図2 菌核病菌の菌叢および病徴の再現

A: 白色菌叢と菌叢周囲に形成された黒色菌核, B, C: 分離菌の接種によって再現された症状

表1 開花期前後の灰色かび病防除薬剤散布が菌核病の発生に及ぼす影響

殺菌剤散布の有無	発生ハウス数/調査ハウス数
あり	1/10
なし	5/11

注) 散布したハウスで発生しているのはクレソキシムメチル水和剤を使用していたため、散布していない園での灰色かび病対策は高圧水散布による花卉の除去で対応

表2 灰色かび病防除薬剤の菌核病菌に対する抗菌活性および発病抑制効果

供試殺菌剤	最小生育阻止濃度(ppm)	防除価
ペノミル水和剤	0.049-0.098	100
イプロジオン水和剤	0.098-0.195	100
イミノクタジンアルベシル酸水和剤	0.098-0.780	100
クレソキシムメチル水和剤	>100	—

注) 最小生育阻止濃度はSU-1, 2, 3, 5の4菌株の平均値を基に算出, 防除価は温州ミカン葉身への接種試験結果から算出 (n=25葉), 3薬剤すべて2,000倍散布での効果

[その他]

研究課題名: 新農薬効果薬害試験

予算区分: 県単

研究期間: 2011~2015 年度

研究担当者: 正司和之, 松尾洋一